

東京大学大学院経済学研究科所蔵

「伝鎌倉出土渡来銭」について

小 島 浩 之 ・ 河 合 忍

1. はじめに

本稿は、東京大学大学院経済学研究科が所蔵し、神奈川県鎌倉市出土と伝わる古銭標本について概要を報告し、若干の考察を加えるものである。

東京大学大学院経済学研究科には、研究用資料として古貨幣（約 12,000 点）、古札（約 24,000 点）のコレクションがある¹。本研究科では、平成 18 年度に文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、これらのコレクションについてデータベース化し、目録と貨幣・紙幣の画像を一般に公開している²。

本稿で考察の対象とする古銭標本は、当該データベース作成のために、収蔵施設を整理していた平成 18（2006）年 6 月 7 日に、偶然発見されたものである³。整理済の古貨幣は、そのほとんどが藤井栄三郎の蒐集にかかるものである⁴。これらは東大寄贈時に藤井によって全点の拓本図譜が編まれているが〔小島 2011〕、当該標本は掲載されていない。したがって、藤井コレクションの一部でないことは明らかである。残念ながら、記録を精査しても、いつどのようにして、東京大学に持ち込まれたものか、現時点では明らかにし得ない。

このように本研究科の所蔵経緯こそ不明だが、当該標本中には伝来素性の判る埋納銭⁵が含まれており、この存在を公にすることは歴史学、考古学の双方にとって意味があると考えられる。大方の批正を賜れば幸いである。

なお本稿は、小島と河合の分担執筆によるものである。本稿で対象とする資料の一部は、伝世の出土品のため、考古学的な知見からの考察が不可欠である。このため、考古学的な部分を河合が、それ以外を小島が分担し、それぞれの執筆分担については担当部分末尾に括弧書きで示した。ただし、最終的な文責は全体調整を行った小島にある。

2. 資料の概要

本標本は、布張り板に貼り付けられた銅銭標本 2 枚からなっており、この 2 枚が上下に積み重ねられて収納容器に収められている。

2.1. 収納容器

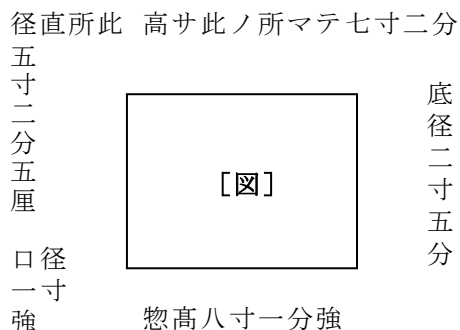
収納容器は二方棧蓋の桐箱（写真 1）で、外寸は縦 33.7cm、横 23.9cm、高さ 3.6cm、内寸は縦 31.5cm、横 22.5cm、深さ 3.1cm、蓋の厚みは 0.3cm を測る。蓋は 3 割程度が欠損しているが、それ以外に収納容器に目立った損傷は見られない。経年による黒ずみはあるが保存状態は概して良好である。また、収納容器に箱裏書等の由緒を記した部分は無い。

2.2. 附属古文書の内容とその検討

1 枚目の標本（以下、標本 1 とする）には、由緒を記した古文書が附属している（写真 2）。古文書の料紙は縦 28cm、横 50cm、厚さ 0.18mm の楮紙で、料紙の袖 0.5cm を糊しろにして、標本 1 の右側面に貼付してある。

文書には、古銭発見のいきさつが記され、埋納容器の図が描かれている。まずは句読点を補った録文を掲げる（「」は改行を示す）。

神奈川県鎌倉郡鎌倉字千葉地御用邸地、
明治三十「」
一年三月、東北面築堤ノ工事中、土砂採
掘ニ際シ、諏訪「」
ノ森ヲ距ル七・八間ノ所ニ於テ、圖スル
如キ陶器發見セリ。「」
中ニ古銭凡四百餘個ヲ納ム。是レ何人ノ
埋藏シタルモノナ「」
ルカ。他日公評ヲ得テ記スル所アラント
欲ス。故ニ先ツ現場「」
及ヒ参照トシテ現品ニ記シ添フ所トス。「」
明治三十一年三月 材木座御旅
館ニテ誌「」



ここから、この古銭は、明治 31 (1898) 年 3 月、鎌倉御用邸地内における築堤工事中に、偶然発見されたものであることが解る。古銭は図 1 のような小型の陶器に約 400 枚入っていたという。後述のように現存する古銭は 96 枚であり、出土した遺物のうち埋納容器と古銭 300 枚程度が伝世の過程で失われたことになる。

鎌倉御用邸は、富美宮允子ふみのみやのぶこ（明治天皇八女・朝香宮鳩彦王妃やすひこ）と泰宮聡子やすのみやとしこ（同九女・

東久邇宮なるひこ稔彦王妃）の避寒のためのものであり、明治 32 (1899) 年に竣工している⁶。鎌倉御用邸は、大正 12 (1923) 年の関東大震災でほぼ倒壊し、再建されることなく昭和 6 (1931) 年に廃止されており⁷、実質の設置期間は二十数年という短いものであった。現在、御用邸の跡地は、鎌倉市立御成小学校と鎌倉市役所となっている。JR横須賀線鎌倉駅の西方約 300mの地点で、鎌倉市中心部に近い住宅街に位置する（図 2）。鎌倉市は市域じたいが中世遺跡としての価値を有するが、その中でも当該地域は今小路西遺跡としてよく知られている場所にあたる。

この標本の出土地点に関する考古学見地からの考察は 3.1.2 で行い、ここでは文献学的な見地から出土地点について検討を加えよう。古文書中には出土地点として「諏訪ノ森ヲ距ル七・八間ノ所」とある。諏訪ノ森については、明治 45 年 2 月 14 日付の『横浜貿易新報』掲載の「諏訪稲荷神社の縁起」に次のような記述がある（下線は引用者）。

（前略）伝へ伝へて諏訪の森と呼び其祠を諏訪稲荷とぞ申されき、去る程に明治三十二年春吾がやむことなき方の御用邸茲に建つべく、森も祠も共に構の内に入るに及び改めて一字を建立あり、やがて諏訪神社と名づけ年々の初午祭盛んに行はるゝに至りぬ⁸

古来諏訪の森と呼ばれた諏訪神社の境内は、御用邸建築に際し敷地内に取り込まれ整備されたことがよく判る。

現在、諏訪神社は鎌倉商工会議所西隣（図 2 の B 地点）に鎮座している。これは昭和 44 (1969) 年の市庁舎の建設に際し移されたのだという。それ以前は現在、市役所の駐車場となっている位置（図 2 の A 地点）に、諏訪神

社と諏訪池と呼ばれる池があった。諏訪の名が残るのは、この付近が鎌倉幕府の御家人諏訪盛重の屋敷跡であったことによる[「鎌倉御成町いまむかし」編集委員会 2008]。

この元の諏訪神社の位置を、鎌倉御用邸が存在した時代の場所に比定するため、図 3 として大正 8 年（昭和 2 年訂正版）の鎌倉御用邸付近の地図を掲げる。築堤で囲まれた御用邸の東北角に「諏訪邸址」とあるのが読み取れるだろう。邸内には諏訪池とおぼしき池もあり、諏訪ノ森が御用邸内に取り込まれたとする記録とも一致する。

さらに、この周辺は御用邸の丁度東北面に当たり、これもまた「東北面築堤ノ工事中」との文書の記録に合致する。したがって、当該古銭のおよその出土地点は、図 3 で「諏訪邸址」と記載される周辺の築堤付近、現在の鎌倉市役所の敷地内であると断定できる。

2.3. 標本 1 について

標本 1 に含まれる銅銭の詳細な分析は 3.1 で行い、ここでは概要について述べる。

標本 1 は、布張り板（縦 30.2cm、横 21cm、厚さ 1cm）を標本台として、縦横 12×8 枚、計 96 枚の銅銭（唐銭、北宋銭、南宋銭）が隙間無く乱雑に貼り付けられている⁹（写真 3）。また板の背面には「松申一四」と墨書された和紙が貼られている（写真 5）。図 4 として標本の拓影を、図 5 として見取図を掲げる。見取図に示したように、便宜的に列を A～H、行を 1～12 として、行列のアルファベットと数字の組み合わせで各銅銭の標本上の位置を表すともに、銅銭の資料番号とした。

表 1 はこれを初鑄年順に整理し、各銅銭の形態情報を一覧にしたものである。外径は外縁間の、内径は内縁間の直径をノギスで計測

したもので、径 A は天地方向、径 B は左右方向を示す。欠損や摩耗により測定が不可能なものは空欄となっている。ただし、これらの銅銭は糊で板に固定されているため、通常の計測に比べて測定値の誤差が大きくなると考えられる。また同じ理由で、はがれていた 2 点を除き、厚みと重量は測定できなかった。

銅銭は摩耗したものや、腐食の進行著しいものも多く、銭文の判読は困難をきわめた。腐食については、長らく地中に埋もれていた以上、仕方のないことであり、逆に言えば、これが出土銭であることの証左ともなっている。銭文の確定は、小島、河合の両名で検討を重ねたが、最終的に判読不能の 5 枚、表面が糊付けされ背面しか現認できない 1 枚の合計 6 枚は、銭種不明とせざるを得なかった。また糊しろ側の背面の情報は解らないので、銭種の細目分類は不可能である。ちなみに、標本台からはがれていた 2 枚は、いずれも無背であった。

2.4. 標本 2 について

2 枚目の標本（以下、標本 2 とする）（写真 4）は、収納容器内では標本 1 の下部に置かれていた。標本台の仕様と、標本台背面の墨書（ただし、こちらは「松申一五」とある）（写真 6）の存在は標本 1 に同じである。標本台の大きさは縦 30.4cm、横 21cm、厚さ 0.8cm を測る。ただし、収納容器下部にあって紫外線等の影響を受けにくかったためか、標本台の布地の状態が標本 1 より良好である。図 6 として標本の拓影を、図 7 として見取図を、表 2 として初鑄年順の一覧を掲げる。測定方法や測定値に関する留意点は標本 1 と同じである。

標本 2 は 35 枚の銅銭標本からなる。標本 1

が唐銭、北宋銭、南宋銭だけであったの対し、こちらは金銭や日本の寛永通宝を含む。また拓影から明らかなように、銭文も明瞭で腐食の進行していない銅銭が多くを占める。各銅銭の貼付間隔も緩やかで、天地左右の方向も揃えて配置されている上、各々の下部には銭文の録文が墨書されている。

このように、標本1と標本2は標本台の仕様としては同じであるが、貼付されている銅銭の種類や質、さらには配列方法には明らかな差がみられる。詳細については3.2で述べる。

3. 考察

3.1. 標本1の古銭について

3.1.1. 古銭群としての所見

古文書が標本台に糊付けされていることや、銅銭の腐食の進行具合などから、標本1の銅銭は、古文書に記される明治31年発見の埋納銭とみて間違いない。

埋納銭については、[鈴木 1996] や [永井 1996] などによって銭種による時期区分と編年がなされている。ここでは、鈴木の時期区分を批判的に検討し修正を加えた永井の見解に従って検討しよう。永井は埋納銭の埋納時期を8期に区分する。画期を決定するのは、最新銭と各時期に特徴的な決定銭である。各期の上限は最新銭の初鑄年とし、下限は時期の決定銭となる銭種が市場に流通するまでである。図8として時期区分を年表の形式にしたものを、表3として各時期の最新銭と決定銭の一覧を [永井 1996] より引用する。

標本1では、最古が開元通宝（初鑄年 621 年）、最新が南宋の咸淳元宝（同 1265 年）となっている。これを表3や図8と照らしあわせると、最新銭が咸淳元宝であることから、

第1期（鎌倉時代後期の13世紀第2四半期から14世紀第1四半期まで）の期間に埋納されたものということになる。

ただし、永井によると第2期の決定銭である至大通宝の渡来量が極めて少ないことから、最新銭が第1期の指標である咸淳元宝で、出土枚数が5,000枚以下の場合は、第3期の洪武通宝が流通する時代（14世紀半ば以降）頃まで埋納時期が下がる可能性があるという [永井 1996]。標本1は出土した銅銭の一部であり、かつ全体量としても400枚と少量である。このため普通ならば、その埋蔵時期は、鎌倉時代後期の13世紀第2四半期から14世紀半ばと少し幅をとって考える必要がある。しかし当該資料については、3.1.2で考察するように古文書に描かれた埋納容器の特徴や、出土地域である今小路西遺跡の調査成果から、時期を絞り込むことができ、ほぼ第1期の埋納銭と結論づけて差し支えないと考えられる。

ところで、標本1は出土した銭貨の一部であることから、実際の銭貨の母集団には、洪武通宝や永楽通宝などの明銭が混入していた可能性も排除できない。しかし、これについては次に述べるようにその可能性は非常に低いと考えられる。

2.3で述べたように、標本1の銅銭の貼り付け方はいささか乱雑である。図9として標本1の各銅銭の天の位置を示した模式図を掲げる。ここから、各銭貨の天地左右の向きが不定であることがはっきりと解る。また図4の拓影からは、方孔の向きすら整えようとしていないこと、部分的に重なってしまっているものや、表裏の誤認があるものの存在などが窺える。これは裏を返せば、出土した400枚の銭貨から96枚を抽出するに当たって、選別が意図的ではなかったことを示している。

仮に銭貨に心ある者が、意識的に唐銭、宋銭だけを選んだのであれば、貨幣の向きや配列にもその蒐集の意識が反映されるはずだからである¹⁰。

全国的にみて、埋納銭を構成する銭種は、北宋銭が約 77%、明銭が約 8.7%、唐銭が約 7.6%であるという[鈴木 1999a]。上述のように抽出が意図的ではないことが窺える以上、唐銭より構成比率が高い明銭が標本中に皆無であるという確率はかなり低いはずである。このことから、本来の 400 枚中には明銭は含まれていなかった可能性が高いと判断される。なお、母集団の 400 枚がどのような性格を有するものであったか、残されたのがなぜ 96 枚であったのかについては 4 で考察する。

(以上 小島)

3.1.2. 古文書所掲の埋納容器について

ここで考察の対象とする埋納容器は、残念ながら失われており現存しない。ただし、幸いにも写真 2 に示したとおり、標本 1 に附属した古文書に「陶器」の所見が略図とともに記されている。まずは、所見および略図を手がかりとして、どのような容器であったかを考えてみたい。

容器はまず、「陶器」であることが文章に記されている。それから、詳細な寸法(法量)が図の周りに記されている。総高【惣高】(＝現存高)八寸一分強(＝約 24.5cm)、胴部最大径五寸二分五厘(＝約 15.9cm)、胴部最大径までの高さ七寸二分(＝約 21.8cm)、口径(＝現存径)一寸強(＝約 3.1cm)、底径二寸五分(＝約 7.6cm)である(図 1)¹¹。

さらに、図を詳細に見ていくとその形態の特徴として、口縁部が小さい、肩の張った形態で胴部最大径が高い位置にくる、胴下部が

直線的にすぼまる、肩部付近に 2 条の櫛描平行文をめぐらす、などが挙げられる。後述するように、この図は略図であるが、形態の特徴を端的ながら正確に捉えていると判断でき、法量の記載とともに本来どのような埋納容器であったかを推測する有効な手がかりになると考える。

以上から、この埋納容器は陶器であり、器種は法量や形の特徴から判断すると、瓶子(口縁部欠損)である可能性が高い(図 10 参照)。

では、具体的にこの陶器の帰属時期や種類について考えてみたい。その際、この陶器の中に納められていた埋納銭と出土したとされる遺跡の情報が重要な示唆を与えると考える。

埋納銭については、3.1.1 で検討したように鎌倉時代後期(13 世紀第 2 四半期から 14 世紀第 1 四半期ないし半ば)に埋納されたものである可能性が高い。つまり、容器も 14 世紀第 1 四半期ないし半ばを下限とした鎌倉時代後期に近い時代に製作されたものである可能性が高いと考えてよいであろう。この時期に該当する陶器のうち、上述した特徴を持つものとしては、古瀬戸(瀬戸焼)をまず挙げることができる¹²。

この陶器が古瀬戸の瓶子であったと仮定した場合、その編年の位置付けはどうであろうか。古瀬戸の研究を精力的に進めている藤澤良祐の研究を参考にすると、この形態の特徴をもつ一群は瓶子Ⅱ類に分類され(図 12)、肩部に櫛描平行文をめぐらす型式は前Ⅲ期以降に主体的になると指摘されている¹³。そのうち、肩の張りが顕著なものは、前Ⅲ期に限定して位置づけることが可能である。その年代は 13 世紀後半と推定されており、先の埋納銭の年代観とも矛盾するものではない。実際の出土遺物と法量を比較すると、図 10 左の瓶

子で口縁部下までの高さ約 24.2cm、胴部最大径約 16.6cm、胴部最大径までの高さ約 20.0cm、口縁部下部の直径約 3.7cm、底径約 8.3cmであり、極めて近似した値を示していることからこの型式（時期）の古瀬戸の瓶子である可能性が高いと判断できる。

次に、この遺物が出土した場所については、2.2 の附属古文書の検討で明らかにしたように、明治時代の鎌倉御用邸地内、現在の鎌倉市立御成小学校と鎌倉市役所が位置する場所に所在する今小路西遺跡である。当遺跡は数次にわたる発掘調査がなされており、その具体像が明らかにされつつある〔河野ほか 1990、今小路西遺跡発掘調査団 1993〕。調査地点周辺では、鎌倉幕府成立の前後に中世的な地割りが現れるようになるが、武家屋敷と推定される遺構が形成されるのは 13 世紀半ば以降であり、屋敷が火災によって焼失する 14 世紀前葉（下限が元弘 3（1333）年の新田義貞による「分倍河原の戦い」か¹⁴⁾）までの期間がこの遺跡の最盛期であると指摘されている〔河野 1990b〕。この調査成果は、先の埋納銭の年代観とも矛盾するものではなく、今小路西遺跡（御成小学校内）の鎌倉時代の層から出土した 681 枚の渡来銭のうち、時期区分の目安となる最新銭が咸淳元宝であること〔河野ほか 1990〕は、今回発見された 96 枚の埋納銭の様相とも一致しており、この埋納銭の資料的価値を保証するとともに、陶器から導き出した年代観との整合性もとれるものとして注目できる。

さらに、当遺跡の調査では、鎌倉時代の層から大量の古瀬戸が出土することが知られており、当時の流通や社会構造を検討する上で注目を集めている〔藤澤 1995b〕。また、古瀬戸製品の時期別出土傾向の検討もなされてお

り〔宗臺 1996〕、13 世紀前半に増加傾向を示し、13 世紀中葉以降 14 世紀前葉まで最盛期を迎え、その後激減することが明らかにされている。

これらの情報も、図に描かれた埋納容器が古瀬戸である蓋然性が高いことの証左となる。

以上から、埋納容器は 13 世紀後半代に製作された古瀬戸（瀬戸焼）の瓶子である可能性が高い（渡来銭を納めるにあたって、口縁部を除去して利用した）と考えておきたい。なお、当遺跡では古瀬戸を埋納容器として利用した例が他にもあることを指摘しておく。（図 11）〔河野ほか 1990〕（河合）

3.2. 標本 2 の古銭について

標本 2 の古銭については、標本 1 と同様に古文書に記された鎌倉出土の埋納銭なのか否かという問題がある。

もし標本 2 が標本 1 と同じ埋納銭であった場合、標本 2 に含まれる寛永通宝がネックとなる。寛永通宝が含まれていたことになれば、標本 1 は 3.1.1 で検討したような中世埋納銭ではなく、近世埋納銭となってしまうからである。

結論から言えば、筆者らは、標本 2 は標本 1 とは無関係なものだと考えている。

標本 2 に含まれる寛永通宝は新寛永と四文銭で、前者は 1697 年、後者は 1768 年の初鑄である。このほかは唐銭、宋銭、金銭で、これらと新寛永との間を埋めるべき、明銭や古寛永が皆無である。これは全体を近世埋納銭の一部と考えた場合に、あまりにおかしな組成となる。

また、既に述べたように、標本 1 の銅銭が劣化の著しいものが多いのに対し、標本 2 の銅銭は状態が比較的良好なものが多い。また

その整理においても、標本 1 とは異なり、向きも正しく整然と並べられ、下部には銭文の録文まで墨書してある。まるで見本銭のような趣なのである。

そもそも、2 枚の標本がともに鎌倉出土の埋納銭なのであれば、同一の容器に収められている以上、わざわざ古文書を標本 1 に糊付けする必要は無い。容器内にそのまま収めておけば十分である。殊更に文書を貼り付けたのは、標本 1 こそが鎌倉出土の渡来銭であることを所蔵者が示したかったと考えるべきである。

このように、残されたモノから蒐集者・旧蔵者の意図を汲み取るように考えた場合、標本 1 と標本 2 を全体で一式の埋納銭とすることは、辻褄の合わない部分が多く、躊躇せざるを得ない。

したがって現時点では、標本 2 の銭貨は、標本 1 とは別系統で蒐集されたものと結論付けておくことが妥当であろう。（小島）

4. 当該資料の位置づけ

3 で検討を行ってきたように、標本 1 と標本 2 は別系統で蒐集された資料と判断される。ここでは本稿の主題である鎌倉出土の埋納銭と推定した標本 1 について、これまでに検討してきた成果をまとめ、その位置づけを明らかにしておきたい。

3.1 で概観したように、実物が残されている埋納銭（400 枚のうち 96 枚）から導き出される年代観と、所見や略図から読み取った埋納容器の年代観、それにこの資料が出土したと伝わる今小路西遺跡からの情報の三者について、相互に整合性があることが明らかになった。それは、描かれた埋納容器が古瀬戸（瀬戸焼）の瓶子であったとの推定が前提となる

が、13 世紀後半代を上限として、14 世紀前葉（元弘 3（1333）年までか）までの時期幅での一致であり、この間に古銭の埋納行為が行われた可能性が高いことを示唆している¹⁵。このことは、中世都市鎌倉の実態を知る上で、重要な位置を占めている今小路西遺跡について、当該資料が新たな情報を加えるという意味でまず注目される。

また、埋納銭を含む当該資料そのものから得られる情報も重要である。当該資料が位置づけられる鎌倉時代は日本国内において貨幣経済が浸透していく段階であり、出土事例が多い埋納銭の分析が当時の社会経済史を考える上で重要視されてきた〔鈴木 1999b ほか〕。近年ではその詳細な内容を検討し、個々の事例の意味や性格を把握することが求められつつある¹⁶。そこで、埋納銭を含む当該資料についてさらに詳細に検討を行い、その位置づけを試みたい。

当該資料のうち、埋納銭については、3.1.1 で詳述したように、時代的にある程度のまとまりを有する「およそ 400 個余り」の渡来銭が、3.1.2 で検討してきた古瀬戸の瓶子である可能性が高い「陶器」の中に納められた状態で出土したことが記録され、そのうち 96 枚の渡来銭が現存する。筆者らはこの 96 枚や約 400 枚という記述に注目している。中近世において、銭 96 枚ないし 97 枚を藁紐などに通して束ね 100 文として（緡銭という¹⁷）、流通していたことが知られている。実際に緡銭は埋納銭全体の中でも出土例が多く〔鈴木 1999b、櫻木 2009〕、さらに今小路西遺跡でも緡銭の状態で何例かの渡来銭が出土していること〔河野ほか 1990〕を勘案すれば、銭 4 緡^{さし}が陶器の中に納められていた可能性が高い。そのうち、1 つを取り出し、板に貼り付けて

コレクションに加えたと考えるのもあながち無理な想定ではないであろう。

その想定が許されるのであれば、より具体的に出土状況を描けることとなる。つまり、武家屋敷地（諏訪氏屋敷か）周辺で、貯蔵具である陶器（古瀬戸）の瓶子を利用して、緞銭の形態で渡来銭を保管していたことが浮かび上がってくるのである。いわゆる「埋納銭」と呼ばれる一括出土銭の発見場所は、概して都市でない辺鄙な場所から出土することが多いとされる。一部の事例は寺院に近接した地点から出土することも指摘されており、埋納容器として壺や大甕、もしくは木箱・木桶・曲物など木質の容器を用い、数千枚もしくはそれ以上の渡来銭が納められることが多いという[鈴木 1999b、櫻木 2009]。それらと比較すると、当該資料は出土地点（都市部）や器種・埋納銭の量など内容が大きく異なるため、性格を異にしている可能性が高いことを指摘できる。屋敷地周辺からの出土であることを勘案すると、再利用目的の経済行為を行うためのいわゆる「備蓄銭」として考える資料であり、鎌倉時代の渡来銭の所有形態の実態や消費単位などを復元していく上で有効な資料となり得ることを示している¹⁸。

以上から、当該資料は出土状況の記録のみの資料ではあるが、本稿で検討してきたように、附属の文書や渡来銭そのものから多くの情報を引き出せる資料であると言える。よって貨幣使用の具体的諸相を明らかにするための基礎資料の一つを加えるという意味において、考古学のみならず、日本史・経済史・貨幣史などの研究を行う上でも、一定の価値を有する資料として評価できるであろう。

(河合)

5. おわりに

以上、今回の再発見を契機として、資料の詳細な調査を行い、様々な角度から検討を加えてきた。残念ながら、発見から現在に至るまで過程で多くの資料を失ってしまったものの、出土の経緯や数量・形態などの情報が比較的詳細に記録されていた事が幸いして、結果として多くの情報を引き出せることとなった。これからの研究に資する資料を加えることができたのではなかろうか。

最後に、この資料の旧蔵者について考察を加えておこう。既に触たように、標本1および標本2の裏側には、それぞれ「松申一四」「松申一五」と墨書した和紙片がある。これは恐らく、蔵品の整理・分類番号であると考えられる。個人の蔵品目録の例としては、土浦藩主土屋家の茶道具目録である「土屋蔵帳」が知られているが[土浦市立博物館 1992]、近代以降も資産家が所有する動産や文書の目録を編むことはよくあることであった。

松は松竹梅、申は十二支の中の一語であって、いずれも順序づけの記号として用いられる。松竹梅の大分類を十二支、数字の順で展開したものがこの和紙片に書かれた記号なのではあるまいか。

旧蔵者には銭貨や歴史の専門知識があったとは思えない。しかし、一方で、骨董的なものを愛でられるような知識と財力のある人物だと推測できる。

改めて先の古文書を振り返ってみると、この記録を執筆した人物は「材木座御旅館」でこれを認めたとしている。鎌倉市材木座付近には、当時皇族の別荘が1邸（伏見宮）、華族の別荘が9邸（毛利家、黒田家、伊達家、大木家、北条家、上村家、河田家、尾崎家、西徳家）あった¹⁹。華族の別荘は皇族も頻繁に

利用しており²⁰、史料上では「御旅館」と称されている²¹。以上から、この古文書が記されたのは鎌倉市材木座にあった、皇族か華族の別邸であることはほぼ間違いないだろう。したがって古銭の旧蔵者は、皇室もしくは鎌倉の材木座に別荘を有していた華族の関係者である蓋然性が高い。

いずれにせよ、「他日公評（表）ヲ得テ記スル所アラント欲ス」という思いをもって記録が残されてから約 114 年、筆者らが思いもかけずこれを引き継ぐこととなったが、その期待に少しでも応えられていることを願うばかりである。（河合・小島）

【附記】本稿の執筆際し、橋本雄（北海道大学大学院文学研究科准教授）、石川一樹（東京大学総合図書館情報サービス課主査）、長崎裕子（鎌倉市中央図書館）、木部徹（（株）資料保存器材）の各氏に教示を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

【引用・参考文献一覧】

浅野晴樹・服部実喜 1995 「各地の土器様相 関東」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
今小路西遺跡発掘調査団 1993 『今小路西遺跡（御成小学校内）第 5 次発掘調査概報』鎌倉市教育委員会
「鎌倉御成町いまむかし」編集委員会 2008
『鎌倉御成町いまむかし』冬花社
鎌倉市市史編さん委員会 1990 『鎌倉市史』近代史料編第 2, 吉川弘文館
鎌倉市市史編さん委員会 1994 『鎌倉市史』近代通史編, 吉川弘文館
河野真知郎ほか 1990 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団
河野真知郎 1990a 「調査地の位置と歴史的背

景」『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団
河野真知郎 1990b 「鎌倉の武家屋敷：今小路西遺跡の発掘調査」『古代史復元』10、講談社
小島浩之 2007a 「東京大学大学院経済学研究科の古貨幣・古札について」『中国出土資料學會會報』34
小島浩之 2007b 「古貨幣・古札画像データベース」『漢字文献情報処理研究』8, 好文出版
小島浩之 2007c 「『古貨幣・古札画像データベース』試行版」公開の意義と課題『月刊 IM』47(1)
小島浩之 2011 「『宝貨録』と『藤氏銭存』」『東京大学経済学部資料室年報』2
是光吉基 1986 「出土渡来銭の埋没年代」『出土渡来銭：中世』ニューサイエンス社
坂詰秀一 1986 「出土渡来銭をめぐる若干の問題」『出土渡来銭：中世』ニューサイエンス社
櫻木晋一 2005 「中世出土銭貨研究の課題と展望」『考古学ジャーナル』526, ニューサイエンス社
櫻木晋一 2007 「出土銭からみた中世貨幣流通」『貨幣の地域史：中世から近世へ』岩波書店
櫻木晋一 2009 『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会
宗臺富貴子 1996 「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について」『研究紀要』3, 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
鈴木公雄 1996 「出土銭貨から見た中世後期の銭貨流通」『「中世」から「近世」へ』名著出版

- | | |
|--|--|
| <p>鈴木公雄 1999a 「出土銭貨からみた中・近世移行期の銭貨動態」歴史学研究会編『越境する貨幣』青木書店</p> <p>鈴木公雄 1999b 『出土銭貨の研究』東京大学出版会</p> <p>鈴木公雄 2002 「出土銭貨研究の展望」『季刊考古学』78, 雄山閣</p> <p>土浦市立博物館 1992 『土屋家の茶の湯：土屋蔵帳と大名家の茶』(第10回特別展図録) 東京大学大学院経済学研究科・経済学部図書館 1999 『東京大学大学院経済学研究科古貨幣コレクション』</p> <p>永井久美男 1996 『中世の出土銭』補遺 I, 兵庫県埋蔵銭調査会</p> <p>橋口定志 1999 「銭を埋めること：埋納銭をめぐる諸問題」『越境する貨幣』歴史学研究会編, 青木書店</p> | <p>服部実喜 1997 「中世都市鎌倉と周辺地域出土の瀬戸窯製品」『研究紀要』5, 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター</p> <p>藤澤良祐 1995a 「瀬戸古窯址群 III：古瀬戸前期様式の編年」『研究紀要』3, 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター</p> <p>藤澤良祐 1995b 「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター</p> <p>峰岸純夫 2002 「中世史研究と埋蔵銭」『季刊考古学』78, 雄山閣</p> <p>(こじま ひろゆき: 東京大学大学院経済学研究科講師・経済学部資料室長代理)</p> <p>(かわい しのぶ: 岡山県古代古備文化財センター調査第一課主任)</p> |
|--|--|

-
- ¹ 目録は〔東大経済1999〕を、コレクションの詳細については〔小島2007abc〕を参照。
- ² 「古貨幣・古札画像データベース」<<http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/shiryo/kahei.html>>
- ³ この時、本稿で取り扱う「伝鎌倉出土渡来銭」以外にも、未整理の貨幣・紙幣等が多数発見されたが、これらの詳細については、今後順次明らかにしてゆきたい。
- ⁴ 藤井栄三郎は東京・本所にて化学工場を営んでいた企業家であり、貨幣の収集家・研究者としても知られている。関東大震災後は財産を整理して、研究機関、学会に対する篤志活動に専念していたようである。詳しくは〔小島2007abc〕を参照。
- ⁵ こういった埋められた銭貨については、鈴木公雄らが蓄蔵目的の「備蓄銭」と称してきた〔鈴木1999b〕のに対し、橋口定志は呪術的、精神的行為からの「埋納銭」と定義する〔橋口1999〕。櫻木晋一はヨーロッパでの用語とも対照し「一括出土銭」と呼ぶことを提唱する〔櫻木2007〕。櫻木の主張は納得のいくものではあるが、櫻木の提案が学界に浸透しているとは言えず、現状では一括出土銭と言った場合に数万単位での出土が想起されてしまう。そこで本稿では、単に埋められていたという事実だけをもって埋納銭の語を用いることとする。通常使われる精神的行為からの埋納銭の意味で使用する場合は「埋納銭」と表記する。なお備蓄銭か埋納銭かの議論については〔橋口1999〕を参照。
- ⁶ 『鎌倉市史』は鎌倉御用邸の建築経緯について、皇室の公式記録を引用しつつ、明治32年に敷地を買収し、同年4月に地鎮祭を挙行、麻布御用邸から殿舎を移築して9月に竣工したとする〔鎌倉市市史編さん委員会1994〕。古文書の記述では、築堤工事が敷地購入前年の明治31年3月になされたことになってしまい、この点は他の史料との整合性を欠く。ただし、敷地の多くは富美宮、泰宮の御養育主任であった林友

幸から購入したものであることや、移築とはいえ地鎮祭から竣工までの期間が短いことなどから、明治 31 年頃から非公式に御用邸造成の準備が始まっていたという可能性がある。これらの諸点については後考を俟ちたい。

- ⁷ 詳細は〔鎌倉市市史編さん委員会 1994〕第 4 章第 3 節「住民と皇室」を参照。
- ⁸ 出典は〔鎌倉市市史編さん委員会 1990〕336 頁。
- ⁹ 布地に和紙片をあてて十分に水分で濡らし、ヨウソデンブレン反応を観察したが呈色しなかった。このため使用されている接着剤はデンブレン系のもではなく膠だと考えられる。
- ¹⁰ 標本 2 では銭文が墨書されているが、これには読み誤りが多い。宋銭は銭文に年号を含むものも多いが、これすら多く間違っているので、おそらく整理者はこれらが宋銭だということもよく解っていなかったと考えられる。すなわち、これも意図的に銭貨を抽出できなかったとする傍証の一つとなろう。
- ¹¹ 総高と口径を「現存」としたのは、口縁部を打ち欠いていると判断するためである。
- ¹² 当該期の関東地方における瓶子を含む貯蔵具については、一般的に東海系諸窯の製品が主体を占めるとの指摘がある〔浅野・服部 1995〕。
- ¹³ 古瀬戸の前期の指標としては、灰釉のみが焼成された段階として位置づけられている〔藤澤 1995a〕。
- ¹⁴ 今小路西遺跡周辺について、鎌倉幕府滅亡時に戦火で焼かれた場所であった可能性が指摘されている〔河野 1990a〕。
- ¹⁵ 服部実喜は鎌倉出土の古瀬戸の分析を行い、出土遺構の時期と製作年代とのズレを指摘し、比較的長期の伝世があったと評価する〔服部 1997〕。
- ¹⁶ 〔坂詰 1986〕、〔是光 1986〕、〔鈴木 2002〕、〔峰岸 2002〕、〔櫻木 2005〕などを参照。
- ¹⁷ 100 枚以下の一定枚数によって構成された銅銭の束を銅銭 100 枚と同一の価値として扱うことを短陌とよび、中国を中心とした近代以前の東アジア地域で広く認められる。日本においては、中世で 97 枚前後を 100 文として扱う風習があったことが出土資料からうかがえる（ただし、数値のばらつきが多い）。近世に入ると、ほぼ 96 枚で統一され、「九六銭」と呼ばれた。
- ¹⁸ 銭貨を土中に埋めて保管し、それを掘り出して利用する風習は、文献資料を調査した峰岸純夫によって、頻繁に行われていたことが明らかにされ、その目的を財産保持のための危機管理にあったと推定した〔峰岸 2002〕。また櫻木晋一も、この現象から読み取れる行為について、東アジアのみならずヨーロッパ社会にも共通してみられるものであることを指摘し、同様の見解を示している〔櫻木 2009〕。
- ¹⁹ 〔鎌倉市市史編さん委員会 1994〕第 3 章第 1 節「別荘地の人々」表 20 を参照。
- ²⁰ 標本 1 の出土と比較的近い時期の例としては、明治 31 年 6 月に、材木座の毛利公爵邸が皇太子（後の大正天皇）の鎌倉行啓の際の宿舎として使われた記録がある〔鎌倉市市史編さん委員会 1990〕330 頁。
- ²¹ 例えば〔鎌倉市市史編さん委員会 1994〕301 頁は、明治 25（1892）年 8 月に皇太子が前田侯爵邸に滞留した際の鎌倉郡役所の公文書を載せるが、そこには次のようにある。

庶第四九四号

皇太子殿下、来ルー三日午前九時三十分御出門、同十時十六分返子発汽車ニテ鎌倉へ 行啓、同所常宮

周宮両殿下御旅館（前田公爵邸）へ御立寄、・・・・・・（以下略）

特集2「貨幣・紙幣の基礎研究」
 東京大学大学院経済学研究科所蔵「伝鎌倉出土渡来銭」について
 (小島・河合)



写真 1. 収納容器

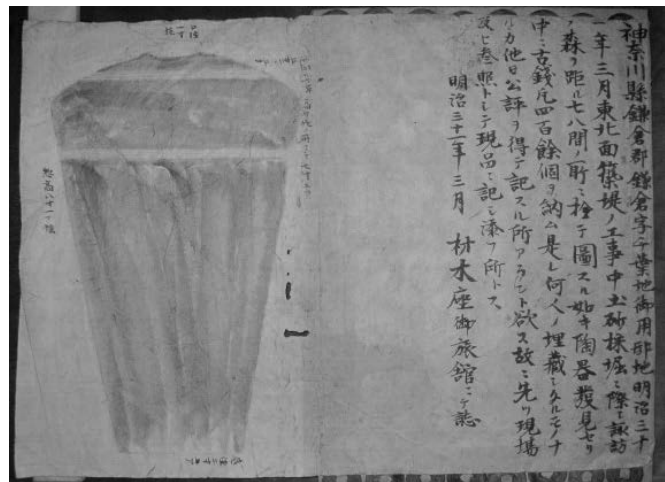


写真 2. 標本 1 附属古文書

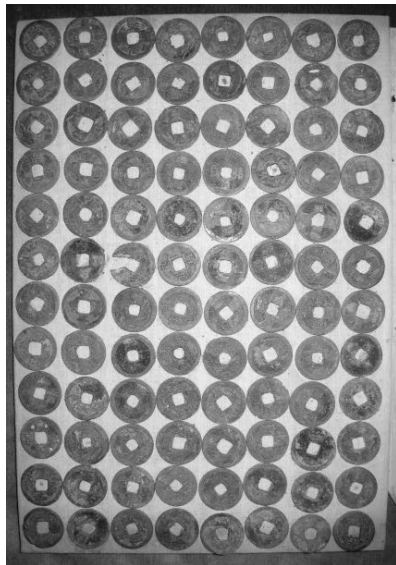


写真 3. 標本 1

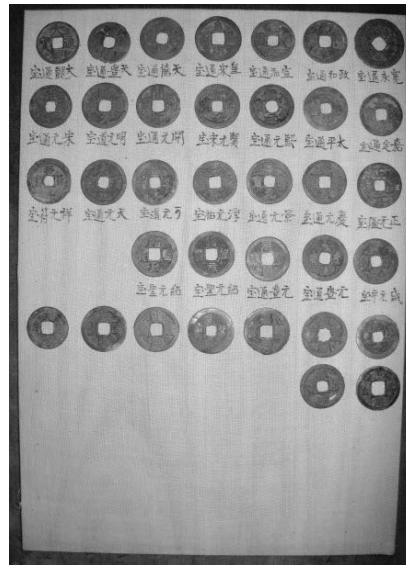


写真 4. 標本 2



写真 5. 標本 1 背面墨書

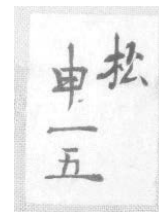


写真 6. 標本 2 背面墨書



図 1. 埋納容器図



図 2. 現在地図
 (国土地理院「1:25,000 地形図鎌倉」より引用)

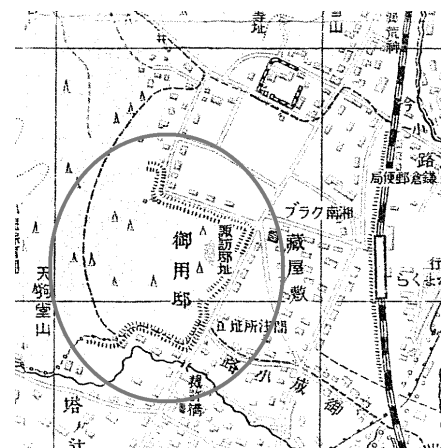


図 3. 大正 8 年鎌倉地域地図
 (昭和 2 年訂正版)

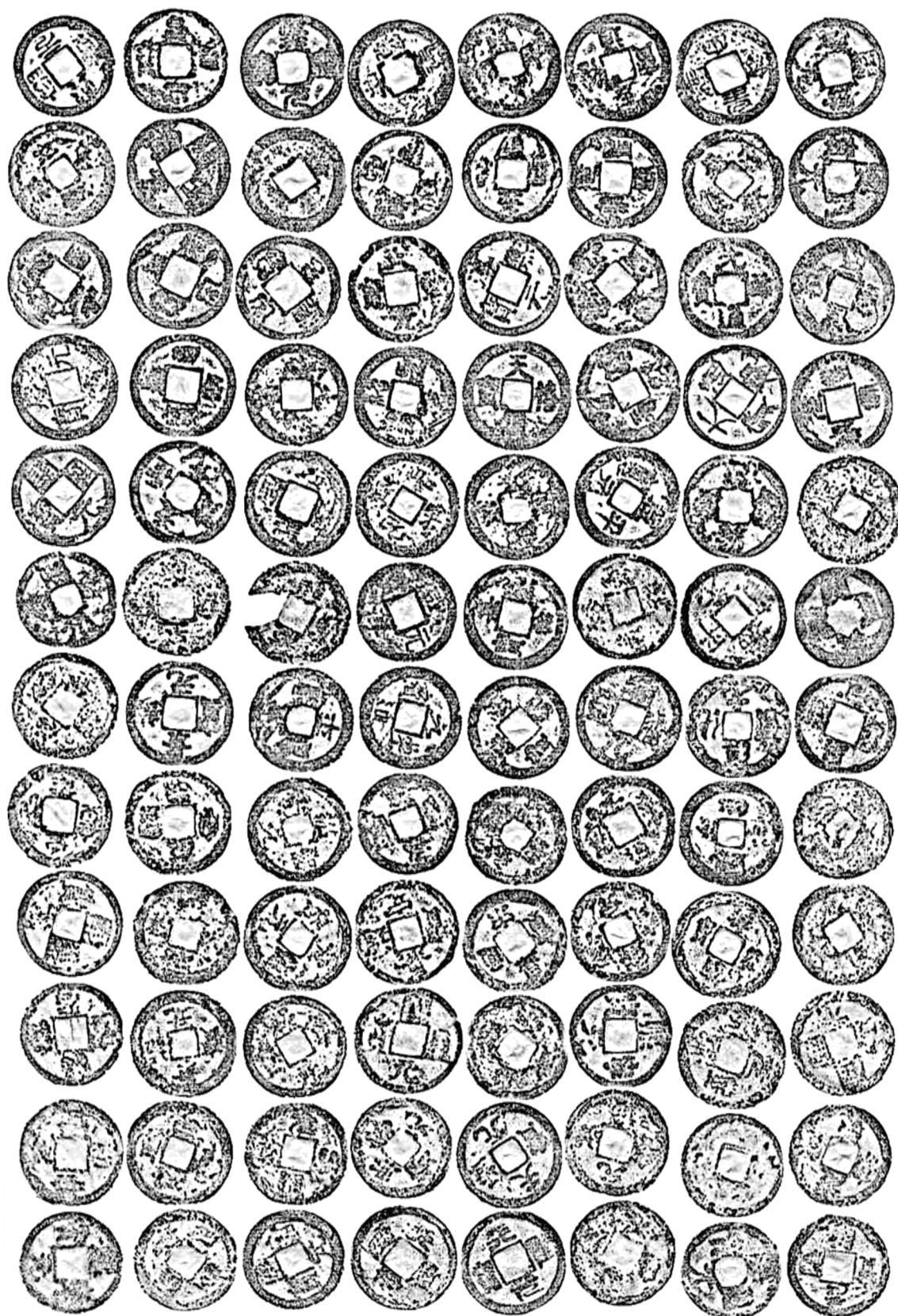


図 4. 標本 1 拓影

特集2「貨幣・紙幣の基礎研究」
 東京大学大学院経済学研究科所蔵「伝鎌倉出土渡来銭」について
 (小島・河合)

□：判読不能文字、■：欠損文字、() 推定文字

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	熙寧元宝	皇宋通宝	熙寧元宝	皇宋通宝	□□□□	天禧通宝	皇宋通宝	熙寧元宝
2	祥符元宝	開元通宝	元(豐)(通)宝	(皇)宋(通)(宝)	天(聖)(元)宝	元豐通宝	皇宋通宝	開元通宝
3	元(豐)通宝	皇宋通宝	皇宋通宝	天聖元宝	淳熙元宝	(熙)(寧)元宝	元祐通宝	熙(寧)元宝
4	慶元通宝	皇宋通宝	元豐(通)(宝)	元豐通宝	天禧通宝	紹聖元宝	大觀通宝	元豐通宝
5	開元通宝	天聖元宝	皇宋通宝	聖宋元宝	(元)豐(通)宝	咸平元宝	熙寧元宝	皇宋通宝
6	開元(通)宝	皇宋通宝	元■(通)(宝)	咸淳元宝	嘉祐通宝	政和通宝	端平元宝	(開)(元)(通)(宝)
7	元(豐)通宝	景(祐)元宝	(太)平通宝	元豐通宝	元(祐)(通)宝	開元通宝	淳化元宝	皇宋通宝
8	至和元宝	元豐(通)宝	紹聖元宝	(熙)(寧)(元)宝	□□(元)(宝)	元豐通宝	至道元宝	□□□□
9	開元通宝	□□(元)(宝)	景德元宝	嘉定通宝	皇宋通宝	熙寧元宝	祥符通宝	元(豐)(通)宝
10	(熙)(寧)元宝	景祐元宝	(開)元(通)宝	開元通宝	(皇)宋(通)宝	熙寧元宝	元豐通宝	開元通宝
11	元(祐)(通)宝	(天)(聖)元(宝)	元祐通宝	熙寧元宝	天聖元宝	元祐通宝	[背面]	元豐通宝
12	熙寧元宝	元豐通宝	開元通宝	天聖元宝	天聖元宝	景(祐)元宝	開元通宝	元(豐)(通)宝

図5. 標本1見取図

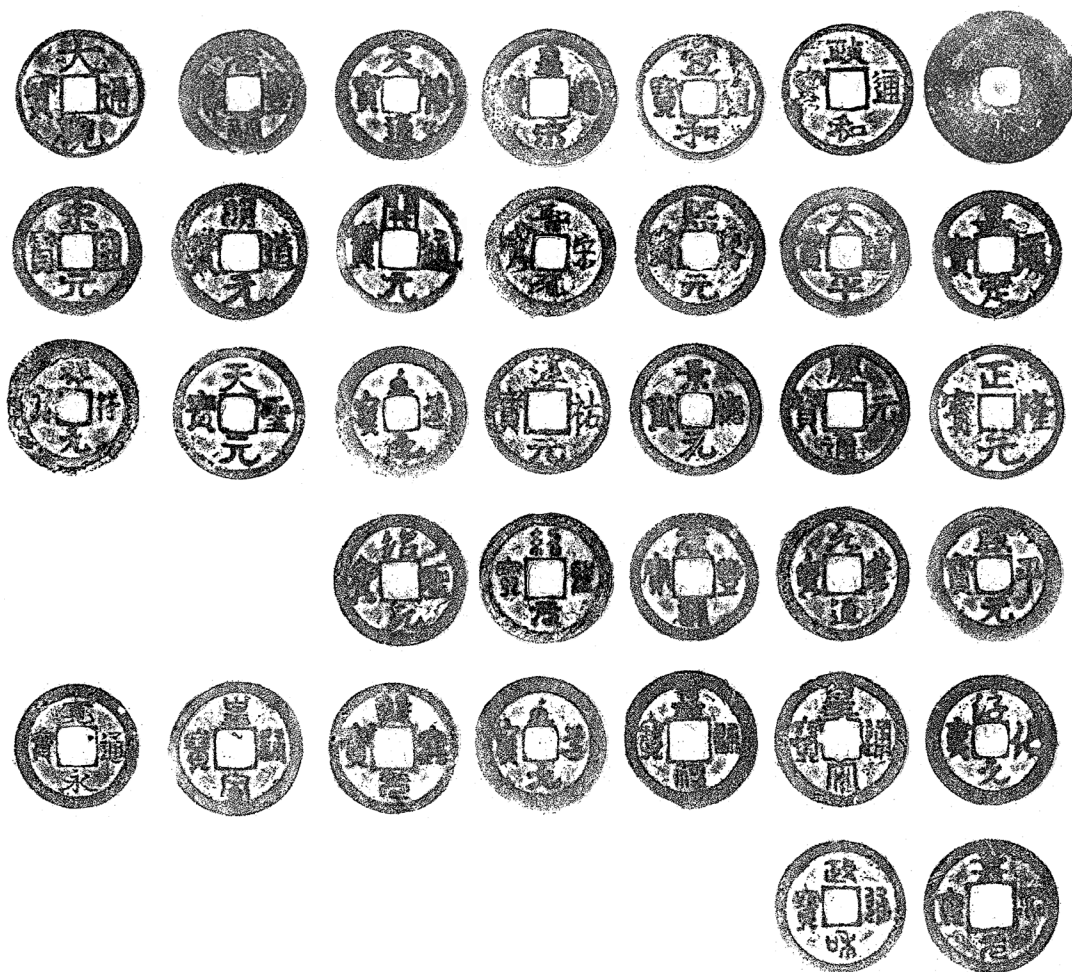


図6. 標本2拓影

	a	b	c	d	e	f	g
1	大觀通宝	元豐通宝	天禧通宝	皇宋通宝	宣和通宝	政和通宝	寬永通宝
2	宋通元宝	明道元宝	開元通宝	聖宋元宝	熙寧元宝	太平通宝	嘉定通宝
3	祥符元宝	天聖元宝	至道元宝	淳祐元宝	景德元宝	慶元通宝	正隆元宝
4			紹聖元宝	紹聖元宝	元豐通宝	元豐通宝	咸平元宝
5	寬永通宝	皇宋通宝	熙寧元宝	至道元宝	嘉祐通宝	皇宋通宝	淳化元宝
6						政和通宝	嘉祐元宝

図7. 標本2見取図

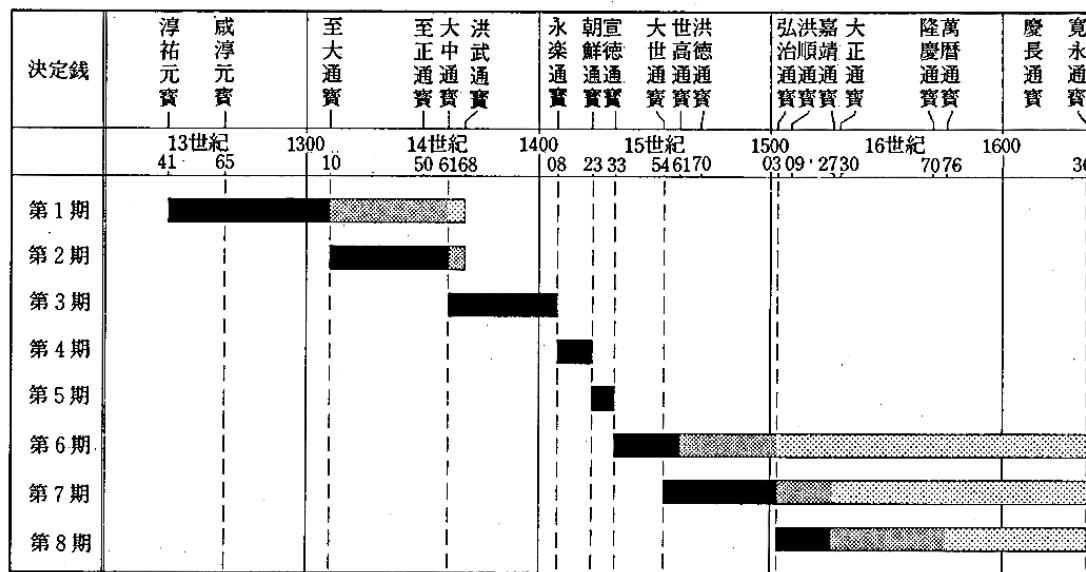


図 8. 埋納銭の時期区分（〔永井 1996〕より引用）

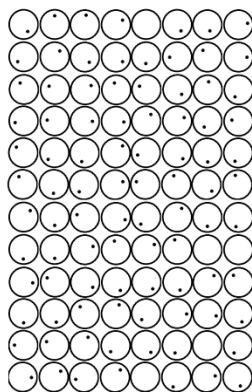


図 9. 標本 1 模式図（●が天の位置）

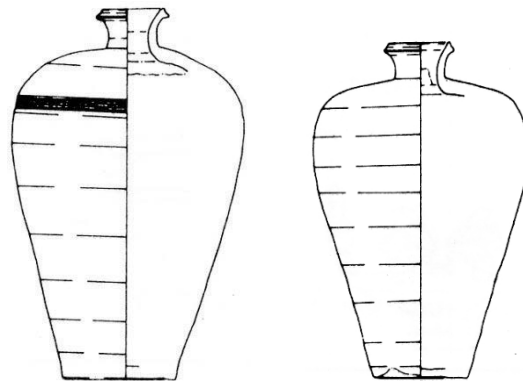


図 10. 埋納容器として用いられた瀬戸焼の例（〔藤澤 1995a〕より引用）

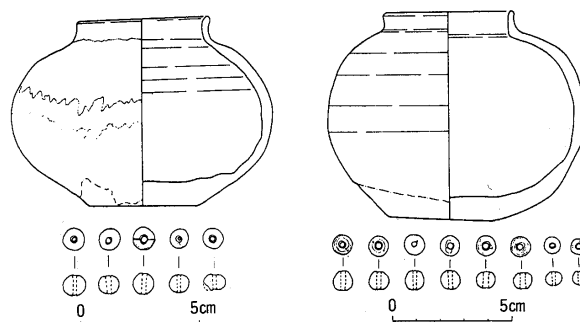


図 11. 埋納瀬戸（〔河野ほか 1990〕より引用）

S = 1 : 9

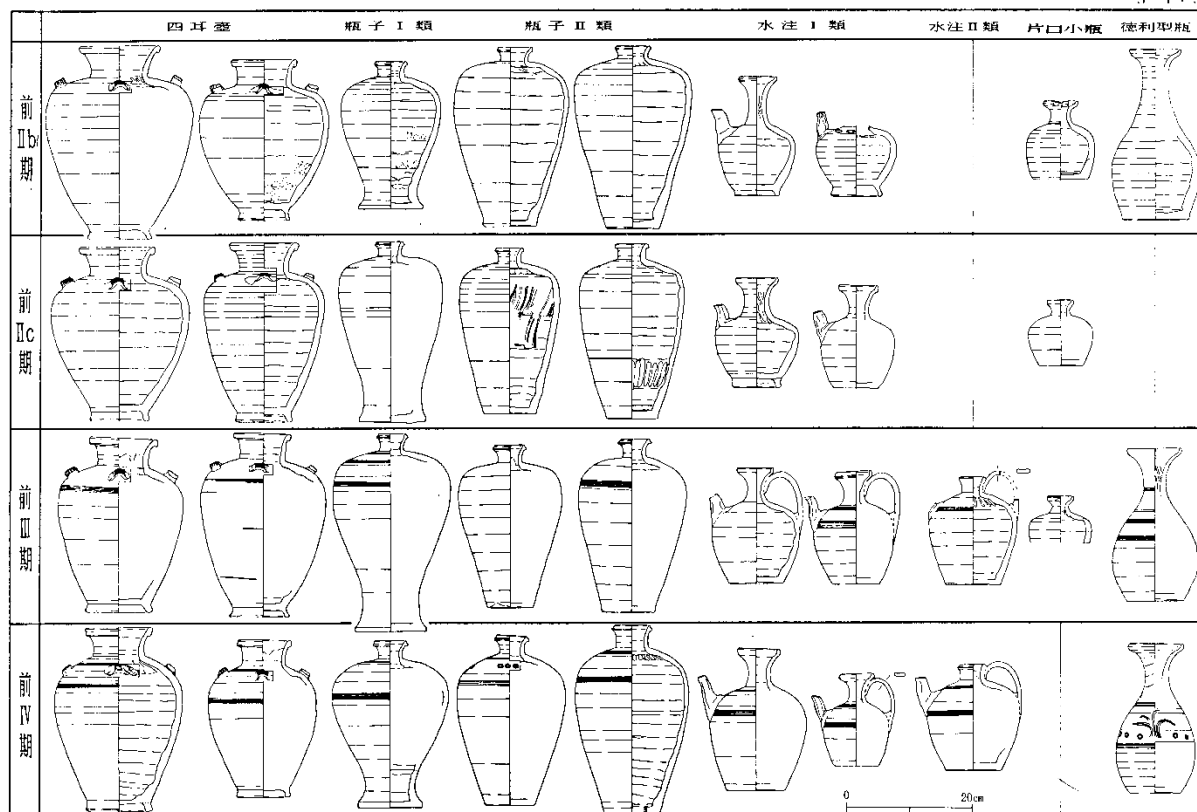


図 12. 古瀬戸編年表 ([藤澤 1995a] より引用)

表 1. 標本 1 銅銭一覧 (初鑄年順)

資料番号	貨幣名	書体	孔形	外径A	外径B	内径A	内径B	厚さ(最小)	厚さ(最大)	重量	初鑄年	備考
A-5	開元通宝	真書	方	24.53	24.40	19.88	19.88				621	唐
A-6	開元(通)宝	真書	方	23.80	23.60	20.01	20.06				621	唐
A-9	開元通宝	真書	方	24.81	24.72	20.71	21.21				621	唐
B-2	開元通宝	真書	方	24.59	24.48	20.90	20.90				621	唐
C-10	(開)元(通)宝	真書	方	23.92	24.08	19.18	19.57				621	唐
C-12	開元通宝	真書	方	23.99	23.77	18.34	17.69				621	唐
D-10	開元通宝	真書	方	25.11	25.40	20.46	20.81				621	唐
F-7	開元通宝	真書	方	24.97	24.91	20.01	20.80				621	唐
G-12	開元通宝	真書	方	23.11	23.20		19.91				621	唐
H-2	開元通宝	真書	円	23.83	23.70	20.16	20.25				621	唐
H-6	(開)(元)(通)(宝)	真書	星	23.86	23.95	17.81	18.34				621	唐
H-10	開元通宝	真書	円	24.59	24.37	19.46	19.79				621	唐
C-7	(太)平通宝	真書	方	24.58	24.76						976	北宋
G-7	淳化元宝	行書	方	24.76	24.80	19.45	18.89				990	北宋
G-8	至道元宝	草書	方	24.71	24.66	19.39	18.65	1.20	1.29	3.50	995	北宋
F-5	咸平元宝	真書	方	24.76	24.89	19.08	18.89				998	北宋
C-9	景德元宝	真書	方	25.14	25.05	19.55	19.58				1004	北宋
A-2	祥符元宝	真書	方	25.20	24.58	19.40	20.31				1008	北宋
G-9	祥符通宝	真書	方	25.27	25.23	20.16	19.70				1008	北宋
E-4	天禧通宝	真書	方	25.66	25.58	19.80	20.04				1017	北宋
F-1	天禧通宝	真書	方	25.27	25.06	19.63	19.94				1017	北宋
B-5	天聖元宝	真書	方	24.84	25.27	19.71	20.47				1023	北宋
B-11	(天)(聖)元(宝)	篆書	方	24.97	24.37	20.48	19.48				1023	北宋
D-3	天聖元宝	真書	方	24.90	24.62	20.66	19.35				1023	北宋
D-12	天聖元宝	篆書	方	24.63	24.78	19.92	20.07				1023	北宋
E-2	天(聖)元(宝)	篆書	方	23.44	23.47	19.71	19.35				1023	北宋
E-11	天聖元宝	真書	方	24.59	24.67	20.38	20.00				1023	北宋
E-12	天聖元宝	篆書	方	24.69	24.80	20.72	20.64	1.26	1.44	3.40	1023	北宋
B-7	景(祐)元宝	真書	方	24.67	25.00	20.79	19.56				1034	北宋
B-10	景祐元宝	真書	方	24.69	25.15	19.19	19.03				1034	北宋

〈表 1 つづき〉

資料番号	貨幣名	書体	孔形	外径A	外径B	内径A	内径B	厚さ(最小)	厚さ(最大)	重量	初鋳年	備考
F-12	景(祐)元宝	篆書	方	24.67	24.92	20.53	21.41				1034	北宋
B-1	皇宋通宝	真書	方	24.42	24.57	21.10	20.46				1038	北宋
B-3	皇宋通宝	篆書	方	24.11	24.76	20.31	19.94				1038	北宋
B-4	皇宋通宝	真書	方	24.63	24.43	19.69	19.61				1038	北宋
B-6	皇宋通宝	篆書	方	24.77	24.97	21.06	20.64				1038	北宋
C-3	皇宋通宝	篆書	方	24.56	24.41	19.92	19.95				1038	北宋
C-5	皇宋通宝	真書	方	24.98	25.13	19.07	19.27				1038	北宋
D-1	皇宋通宝	真書	方	25.28	25.40	19.32	18.66				1038	北宋
D-2	(皇)宋(通)(宝)	篆書	方	23.62	23.59	19.11	18.73				1038	北宋
E-9	皇宋通宝	真書	方	24.54	24.62	18.43	18.70				1038	北宋
E-10	(皇)宋(通)宝	真書	方	24.61	24.58	19.75	20.32				1038	北宋
G-1	皇宋通宝	篆書	方	24.78	24.94	19.75	20.04				1038	北宋
G-2	皇宋通宝	真書	方	23.44	24.11		18.39				1038	北宋
H-5	皇宋通宝	篆書	方	25.15	25.05		19.44				1038	北宋
H-7	皇宋通宝	篆書	方	24.31	24.34	20.33	20.40				1038	北宋
A-8	至和元宝	篆書	方	24.37	24.50	20.27	19.30				1054	北宋
E-6	嘉祐通宝	真書	方	24.60	24.57	18.47	18.87				1056	北宋
A-1	熙寧元宝	篆書	方	23.45	23.52	18.92	18.74				1068	北宋
A-10	(熙)寧(元)宝	篆書	方	24.14	24.15	20.17	19.95				1068	北宋
A-12	熙寧元宝	真書	方	23.83	23.82	20.40					1068	北宋
C-1	熙寧元宝	篆書	方	24.78	24.67	19.56					1068	北宋
D-8	(熙)寧(元)宝	篆書	方	23.62	23.67		20.13				1068	北宋
D-11	熙寧元宝	真書	方	23.53	23.60	17.43	18.33				1068	北宋
F-3	(熙)寧(元)宝	真書	方	24.31	24.33						1068	北宋
F-9	熙寧元宝	真書	方	23.86	23.60	20.24	19.33				1068	北宋
F-10	熙寧元宝	真書	方	23.62	24.07	20.41	20.57				1068	北宋
G-5	熙寧元宝	篆書	星	24.59	24.35		19.85				1068	北宋
H-1	熙寧元宝	真書	方	23.67	23.83	20.45	19.94				1068	北宋
H-3	熙(寧)元宝	篆書	方	24.70	25.03						1068	北宋
A-3	元(豐)通宝	篆書	方	24.15	23.98	20.05	20.10				1078	北宋
A-7	元(豐)通宝	篆書	方	25.02	24.81	20.19	20.66				1078	北宋
B-8	元(豐)通宝	篆書	方	24.82	24.94	20.20	20.19				1078	北宋
B-12	元(豐)通宝	篆書	方	23.92	24.16	19.57	19.64				1078	北宋
C-2	元(豐)(通)宝	篆書	方	24.68	24.78		18.55				1078	北宋
C-4	元(豐)(通)(宝)	行書	方	23.98	23.70	18.36	18.62				1078	北宋
D-4	元(豐)通宝	篆書	方	24.17	24.17	17.39	18.18				1078	北宋
D-7	元(豐)通宝	行書	方	24.15	24.01	17.58	17.77				1078	北宋
E-5	(元)豐(通)宝	行書	方	24.73	24.73	18.26	18.37				1078	北宋
F-2	元(豐)通宝	篆書	方	23.92	23.92	19.25	19.44				1078	北宋
F-8	元(豐)通宝	行書	方	24.42	24.73	20.40	20.37				1078	北宋
G-10	元(豐)通宝	篆書	方	25.23	25.22	21.10	20.47				1078	北宋
H-4	元(豐)通宝	篆書	方	24.32		19.27	19.68				1078	北宋
H-9	元(豐)(通)宝	行書	方	24.51	24.35	19.67	19.38				1078	北宋
H-11	元(豐)通宝	篆書	方	24.16	24.33		19.19				1078	北宋
H-12	元(豐)(通)宝	篆書	方	24.31	23.94	19.22	19.32				1078	北宋
A-11	元(祐)(通)宝	篆書	方	24.45	24.78	20.81	20.45				1086	北宋
C-11	元祐通宝	篆書	方	24.33	24.40	19.16					1086	北宋
F-11	元祐通宝	行書	方	24.68	24.57	20.22	20.63				1086	北宋
E-7	元(祐)(通)宝	篆書	方	24.10	24.03	18.49	19.13				1093	北宋
G-3	元祐通宝	行書	方	23.98	24.24	19.54	20.18				1093	北宋
C-8	紹聖元宝	行書	方	24.38	24.26	18.67	18.73				1094	北宋
F-4	紹聖元宝	行書	方	24.53	24.64	19.11	18.07				1094	北宋
D-5	聖宋元宝	行書	方	24.48	24.14	18.45	18.51				1101	北宋
G-4	大觀通宝	真書	方	24.63	24.93	22.41	21.17				1107	北宋
F-6	政和通宝	篆書	方	24.36	24.65	21.72	21.64				1111	北宋
E-3	淳熙元宝	真書	方	24.33	24.32	19.90	20.15				1174	南宋
A-4	慶元通宝	真書	方	24.61	24.76	20.18	19.08				1195	南宋
D-9	嘉定通宝	真書	方	24.32	24.73	20.01	20.01				1208	南宋
G-6	端平元宝	真書	方	24.75	24.85	20.45	20.77				1234	南宋
D-6	咸淳元宝	真書	方	23.45	23.51	19.07	18.76				1265	南宋
B-9	□□(元)(宝)	行書	方	24.54	24.35	18.69	18.28					
C-6	元■(通)(宝)	篆書	方	24.43	24.68	19.12						
E-1	□□□□		方	24.60	24.46							
E-8	□□(元)(宝)	篆書	星	24.23	23.96	17.06	17.12					
G-11	[背面]		方	24.08	24.02	19.72	19.00					
H-8	□□□□		方	24.32	23.45							

□：判読不能文字、■：欠損文字、() 推定文字

内外径および厚さの単位は mm、重量の単位は g

表 2. 標本 2 銅銭一覧 (初鑄年順)

資料番号	貨幣名	書体	孔形	外径A	外径B	内径A	内径B	厚さ(最小)	厚さ(最大)	重量	初鑄年	備考
c-2	開元通宝	真書	方	23.97	23.87	20.05	20.37				621	唐
a-2	宋通元宝	真書	方	23.99	23.78	19.22	19.47				960	北宋
f-2	太平通宝	真書	方	24.24	24.29	18.63	18.92				976	北宋
g-5	淳化元宝	行書	方	24.17	24.31	18.51	18.69				990	北宋
c-3	至道元宝	草書	方	24.61	24.62	18.64	18.44				995	北宋
d-5	至道元宝	草書	方	24.86	24.94	18.86	18.44				995	北宋
g-4	咸平元宝	真書	方	24.77	24.91	18.79	18.79				998	北宋
e-3	景德元宝	真書	方	24.62	24.76	20.84	20.14				1004	北宋
a-3	祥符元宝	真書	方	24.96	24.86	18.65	18.37				1008	北宋
c-1	天禧通宝	真書	方	24.30	24.20	19.64	19.38				1017	北宋
b-3	天聖元宝	真書	方	24.78	24.90	20.48	20.79				1023	北宋
b-2	明道元宝	真書	方	25.24	25.33	21.08	21.03				1032	北宋
b-5	皇宋通宝	篆書	方	24.97	24.82	20.41	20.15				1038	北宋
d-1	皇宋通宝	真書	方	25.45	25.37	19.45	19.44				1038	北宋
f-5	皇宋通宝	篆書	方	24.95	24.92	20.00	19.56				1038	北宋
e-5	嘉祐通宝	篆書	方	25.61	24.91	18.88	19.25				1056	北宋
g-6	嘉祐元宝	篆書	方	24.90	24.98	20.78	21.11				1056	北宋
c-5	熙寧元宝	篆書	方	24.28	24.58	20.53	20.48				1068	北宋
e-2	熙寧元宝	真書	方	24.33	24.09	20.11	19.34				1068	北宋
b-1	元豐通宝	篆書	方	23.68			18.00				1078	北宋
e-4	元豐通宝	篆書	方	23.90	23.81	19.41	19.29				1078	北宋
f-4	元豐通宝	行書	方	24.67	24.66	19.86	20.03				1078	北宋
c-4	紹聖元宝	行書	方	24.66	24.74	19.43	19.42				1094	北宋
d-4	紹聖元宝	篆書	方	24.55	24.67	20.06	19.85				1094	北宋
d-2	聖宋元宝	行書	方	24.51	24.52	19.34	19.30				1101	北宋
a-1	大觀通宝	真書	方	24.15	24.18	21.67	21.87				1107	北宋
f-1	政和通宝	隸書	方	24.51	24.46	20.99	21.54				1111	北宋
f-6	政和通宝	篆書	方	24.54	24.50	20.29	20.09				1111	北宋
e-1	宣和通宝	真書	方	23.76	23.94	20.26	20.35				1119	北宋
g-3	正隆元宝	真書	方	24.81	24.84	21.71	21.90				1157	金
f-3	慶元通宝	真書	方	24.05	24.29	20.07	20.24				1195	南宋
g-2	嘉定通宝	真書	方	23.94	23.96	19.83	19.75				1208	南宋
d-3	淳祐元宝	真書	方	23.57	23.61	20.47	20.19				1241	南宋
g-1	寬永通宝	真書	方	28.48	28.22	20.84	21.06				1697	日本(新寬永)
a-5	寬永通宝	真書	方	23.27	23.26	18.82	18.26				1768	日本(四文銭)

□: 判読不能文字、■: 欠損文字、() 推定文字

内外径および厚さの単位は mm、重量の単位は g

表 3. 最新銭と決定銭 ([永井 1996] より引用)

●は時期区分の決定銭

	王朝名	最新銭	初鑄年	時期区分
第1期	南宋	●淳祐元寶 皇宋元寶 開慶通寶 景定元寶 ●咸淳元寶	1241 1253 1259 1260 1265	13世紀第2四半期～14世紀第1四半期 ※出土枚数が5000枚以下の場合は、洪武通寶が流通するまで下る可能性がある。
第2期	元	●至大通寶 至正通寶	1310 1350	14世紀第1四半期～同第3四半期
第3期	明	●大中通寶 ●洪武通寶	1361 1368	14世紀第3四半期～15世紀第1四半期 ※最新銭が大中通寶の場合は1370年前後に埋蔵された可能性が高い。
第4期	明	●永樂通寶	1408	15世紀第1四半期
第5期	朝鮮	●朝鮮通寶	1423	15世紀第2四半期 ※宣德通寶の検出率は第6期の平均が1/237であるため、最新銭が朝鮮通寶の場合は1430年前後に埋蔵された可能性が高い。
第6期	明	●宣德通寶 大和通寶	1433 1443	15世紀第2四半期以降
第7期	琉球 琉球 琉球	●大世通寶 光順通寶 ●世高通寶 ●洪德通寶	1454 1460 1461 1470	15世紀第3四半期以降 ※最新銭の初鑄年が1450年～1499年まで。
第8期	明 後明 後明	●弘治通寶 ●洪順通寶 ●嘉靖通寶 ●大正通寶	1503 1509 1527 1530	16世紀第1四半期以降 ※最新銭の初鑄年が1500年以降のもの。